7　ガスパール・ボアンの人体構造の記述における命名法と分類法

澤井　直
順天堂大学解剖学・生体構造科学講座

本発表で扱うのは，16 世紀末から 17 世紀初頭にかけての代表的な医科学者であるガスパール・ボアン（Gaspard Bauhin, 1560–1624）の解剖学における命名法と分類法との関係である．

ボアンは古今の医学書に通暁し，バーゼル大学医学部において解剖学・植物学などの教鞭を執り，またギリシア語も教えていた．

ボアンの解剖学の著作は，新発見に乏しいことで低く評価されることもあったが，分かりやすい形で人体に関する詳細な知見を記載するという点に関して非常に優れていた．主著とされる『解剖劇場』（1605）は当時の解剖学の知見を整理統合し，多くの人に読まれていた．さらにボアンは現在へとつながる解剖学名の整理統合者でもあった．特に筋肉については 16 世紀中頃のシルヴィウス（Jacobus Sylvius, 1478–1555）が用いた命名法を踏襲し，シルヴィウスが名付けなかった構造にも名称を与え，当時認識されていたすべての筋を個別の名称で記述している．その際に「筋（musuculus）＋最長の（longissimus）」というように「（筋肉，骨，血管，神経などの）名詞＋各構造の特徴を表す形容語」の二つの語句からなる名称を用いている．

ボアンによる解剖学名は単に既に使われていた命名法を拡張して，筋肉や骨などの構造同士を区別しただけではなく，分類操作が命名法の背景にあると考えられる．この解剖学における分類操作は特に『解剖学』（Anatomes, 1591–2）の分析から明白になる．

『解剖学』第 1 巻は頭や手などの人体の外形的な特徴について，各部分の古今の著作における記述やそこで用いられる名称を挙げ，一つの塊としての人体を各部へと分けている．第 2 巻の第 1 部では，アリストテレスの『動物部分論』（De partibus animalium）の議論を引き継ぎ，また後世の医学者によるアリストテレス解釈に触れながら人体の各部分の内部構造を扱っている．ここで焦点となっているのは人体各部で共通してみられる構造，すなわち人体の素材・質料である．ボアンは「divisio」（区分）という言葉を多用しながら，人体の各部分を構成する素材を互いに区別していき，それ以上には区分不可能であるような素材を等質部分（pars similaris）と呼ぶ．等質部分には血液や胆汁などの液体の等質部分や骨，軟骨，靱帯，膜，繊維，神経，動脈，静脈，筋肉などの固体の等質部分がある．第 2 巻第 2 部では，固体の等質部分のそれぞれの性質や作用について論じた後で，同じ等質部分に属するものを位置や形状，大きさ，他の構造との連絡などの特徴によって区別する．

以上のようにボアンの『解剖学』における議論は，人体→各部→構成要素となる等質部分→等質部分に属するもののさらなる区分，という順序で分類を行っている．このような分類操作は彼の解剖学名の命名法にも反映されていると考えられる．彼の命名法は言い換えるならば「等質部分を表す名詞＋等質部分に属する各構造の特徴を表す形容語」となっているのであり，同じ等質部分に属する要素がそれぞれの特徴によって区分されて名付けられているという点において，名称そのものが分類操作を前提としたものだと言える．さらに「等質部分を表す名詞」を用語の先頭に提示すること自体も，人体の各部分を等質部分へと分けるという分類操作を前提としている．

ボアン以外の通常の解剖学書の記述においてもアリストテレス以来の等質部分の概念が取り入れられ，解剖学が上記のような区分・分類操作を古くから取り入れていることは意識されていた．しかし，ボアンのように明示的に分類操作を行ってはおらず，また命名法に対応させてもいないため，ボアンにおける分類法と命名法の扱いは解剖学史上でも特異なものであると考えられる．

従来は現在に通じる用語が多いという用語そのものの優秀さからボアンの解剖学名の整理が高く評価されてきたが，ボアンの解剖学名は対象を指し示すための単なる名前ではなく，彼の人体や人体を構成する要素についての分類法を反映した名称なのであり，この点の影響についても考慮していく必要があると思われる．

本研究は文部科学省科学研究費（23701008）の助成を受けたものである．